

SHORT ESSAY

「バンコクで考えたこと」

白石 隆

Takashi Shiraiishi

しらいし・たかし 京都大学東南アジア研究センター教授
1950年、新居浜市生まれ。宮西小学校、愛光学園中学・高校を卒業したあと、東京大学、コーネル大学に学ぶ。
1979年、東京大学助教授、1987-96年、コーネル大学助教授、准教授、教授、1996年より現職。著書に『海の帝国』（中公新書）ほか。

いまバンコクにいる。チュラロンコン大学で開催された会議「いま世界の秩序はどう変容しつつあるのか」に出るためである。

折柄、いまアフガニスタンで進行中の戦争が話の中心となった。タイ人には圧倒的に仏教徒が多い。しかし、会議には、タイにこんなにイスラム教徒がいたのかと思うほど、多くのムスリムがいた。タイ南部出身の人が多い。

イスラム教徒が戦争について我々と違う考えをもっていることは十分、承知していた。しかし、それでも、かれらがこれほどアメリカに不信感をもっていることには考えさせられた。

かれらに対して、テロは犯罪である、といってもほとんど説得力はない。パレスティナを見る、あそこではすでに半世紀にわたってパレスティナ人がイスラエル国家のテロに曝されている、またサダム・フセインにせよ、ウサマ・ビン・ラーデンにせよ、タリバンにせよ、そもそもかれらを「化け物」にしたのはアメリカではないか、とかれらは言う。わ

たしは九月十一日のテロは犯罪であると思うし、犯罪には断乎、戦うべきだと思ふけれども、こういう議論にもたしかに一理ある。

ここで問題となっているのは、正義である。日本では、ビン・ラーデンのようなイスラム主義者に対抗するにはイスラム世界における貧困の問題をなんとかしなければだめだ、という議論がよく行われる。しかし、わたしには、これは、なんでも経済の問題と考えるがちな日本人的はずれの議論と思えてならない。パレスティナ問題でイスラエルを一方的に支持し、サウジアラビアで絶対王制を支持し、イラン・イラク戦争でサダム・フセインを支援し、アフガニスタンでビン・ラーデンのようなムジャヒディーン（イスラムの義勇兵）を支援した、このために、ごく普通のイスラム教徒が、自分で撒いたタネではないか、とアメリカを信用しないのである。御都合主義はだめだ、というごくあたりまえのことがいまさらながらに明らかになっている。